

もう随分前のことだが、ある女子中学校のカウンセリング・ルームに一人の生徒が訪れてきた。「ボーイフレンドが自殺したのです」と言う。先方の親は彼女のことを知っていたか？自殺したという連絡は？葬儀には？そうした質問は私の念頭になかった。

「自分は彼のために泣いてあげられる唯一の人だと考えるようにしようね。彼が死ぬ間際まで愛してあげたのだ、と頭の中で思い描いたら」と言うと、彼女は「はい」と答えた。彼女の目には涙はなかった。「では、また、何かあったら声を掛けて下さい」と部屋から送り出した。

一人の自殺者のあとに、



こうした心の苦しみにさいなまされる人が大勢いる。事情を聞くのは大切なことかもしれない。でも、なぜ彼女がカウンセリング・ルームを選んだのかを考えると、聞くこと自体が心を傷つけようである。

以前、ある大学の女子学生が「悩みは友達に話せば解決するのですが」と言っていたことを思い出す。来談者が求めているのは癒しなのである。恋人が自殺した。さまざまな思いが彼女の脳裏を襲ってくる。それに打ち勝つのは恋人を真に愛したのは自分だ、という強い思いが必要であろう。次は男子高のA君のこと。彼は私を訪ねる前日もB君のいたマンションのベランダに行ったことを話してくれた。学校は違うが

みんなで考えるメンタルヘルス ⑭

自殺、遺された友人たち

中根 晃 (理事長・元実践女子大学教授)

B君はA君の親友で、半年ほど前にそこで自殺した。若い人が自殺すると家族はできるだけ内密に葬儀を済ませてしまうが、親友にとってはそれもまたつらいので、B君のことを思い出す。B君の何を思い出すか、とたまたまない気持ちになって現場に駆けつけて冥福を祈るらしい。

A君はクラスメートのC君が自殺したのと同じように、B君はA君の親友で、半年ほど前にそこで自殺した。若い人が自殺すると家族はできるだけ内密に葬儀を済ませてしまうが、親友にとってはそれもまたつらいので、B君のことを思い出す。B君の何を思い出すか、とたまたまない気持ちになって現場に駆けつけて冥福を祈るらしい。

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の有名な序文で始まる松尾芭蕉の『奥の細道』では、約150日間の旅の結びをこのように結んでいる。これが病死、あるいは事故死であったら親友たちが多数、焼香に訪れたであろう。自殺した生徒の遺族のつらい気持ちも、クラスメイトたちが冥福を祈ってくれたことで多少とも癒されたであろう。こうした対応は自殺のポストベンションといわれている。予防をプレベンションというので、事後対応ということになる。

問題は職場に自殺者が出たときである。職場の人たちは本人の自殺の背景について色々な憶測をする。専門家は自殺のポストベンションの大切さを知っているが、上司の参加、遺族の許可など、越えなければならぬ障壁があり、どのように取り組むか、まだ試行段階のようである。冥福を祈る、お寺さんにお経をあげてもらおう、月命日にお墓に線香をあげに行く、などの宗教的行為はポストベンションとして遺族の気持ちを和らげてくれるであろう。

燃える青春

部活動拝見 弓道部

岐阜県 県立大垣工業高校2年

栗田 和也君 (17)



「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の有名な序文で始まる松尾芭蕉の『奥の細道』では、約150日間の旅の結びをこのように結んでいる。これが病死、あるいは事故死であったら親友たちが多数、焼香に訪れたであろう。自殺した生徒の遺族のつらい気持ちも、クラスメイトたちが冥福を祈ってくれたことで多少とも癒されたであろう。こうした対応は自殺のポストベンションといわれている。予防をプレベンションというので、事後対応ということになる。

中心選手としての自覚を胸に



5人が射場に立つ。チームの流れを左右する“大前”で的に向かう栗田君

「彼はレギュラーとして頑張ってくれています。部活は皆勤です、精神的にも落ち着いていますので、チームとしても期待しています」と、高橋先生は高く評価している。

「彼をかくとさっぱり中らなくなる」という弓道。「1年のときは的中率がうれしかったんですが、今は4射中最低でも2本は的中しないと…」と、栗田君はチームの中心選手としての心構えを強く持っています。

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の有名な序文で始まる松尾芭蕉の『奥の細道』では、約150日間の旅の結びをこのように結んでいる。これが病死、あるいは事故死であったら親友たちが多数、焼香に訪れたであろう。自殺した生徒の遺族のつらい気持ちも、クラスメイトたちが冥福を祈ってくれたことで多少とも癒されたであろう。こうした対応は自殺のポストベンションといわれている。予防をプレベンションというので、事後対応ということになる。



「狐とランプ」油彩・カンバス

名古屋芸術大学 美術学部 油絵学科4年 眞野 宏美



精神・身体・弓矢が渾然一体となって、発射の気を熟させる

と、顧問の高橋幸先生は語ってくれた。大垣工業は、10回インターハイに出場している強豪校だが、ここ15年ほど出場していない。東海地区の弓道は全国的にみて激戦地で、東海を制するものは全国を制す



高橋(後列左端)、西川(後列右端)両先生と大垣工業高校弓道部の部員たち(栗田君は中列右から2人目)